

## ひと・ネットワーク 137

「ここが私のいえ、わたしの部屋」

厚木精華園  
末村 光介



グループホームの泊まりに入ると、こんな言葉を耳にします。

「ここが私のいえなのだから、いろいろな事があってもうまくやっていかなきゃ」

73歳のAさんは長年にわたる施設生活を経て、2年前に当園のホームに入居しました。70歳といえば高齢化に伴い、それまでおっくってきたグループホームでの暮らしが続けられなくなったと、入所施設に戻るのが一般的と考えられてきました。しかし、施設では集団生活を余儀なくされ、その方が望む暮らしを保障することが難しいことは読者の皆さんもご存知だと思います。

当園ではホームを、高齢の知的障害者の入所施設として平成6年にオープンしました。

年齢を重ね人生のゴールが見えてきた方々に、その方らしい暮らしをしていただき、「いろいろあったけれども、楽しい人生だった」と実感していただける支援をしたいと考えています。ですから、入所歴数十年の方でも、ご本人が希望されるのであれば、ホームでの暮らしを作っていくしたいと思います。

ご本人が望む限り支援体制を整え、その質を高め、ホームヘルプサービスも活用し、医療も含めた地域の資源との連携を図りながらその望みに応えていく必要があります。時代は、真のノーマライゼーションをいかに推進するのかを、私たちに問い掛けているのです。

Aさんに、寂しかったり大変だったら、慣れた施設に戻っても構いませんと話しても、Aさんは「いやだ、ここ（ホーム）がいいよ」と答えてくださいます。

私たちはこの言葉を真摯に受け止め、支援していかなければなりません。厚木精華園では、この10年間に19名の方を見送りました。グループホームでの普通の暮らしを支えながら、最後までホームで暮らしていただければ嬉しいと思います。

やすい服づくりの活動も、人の装いの幅を大いに指摘し、生命の燃やし方を勇気つけるもので、外見の違いを「自分らしさ」の自信に結びつける機会を失いそうになった時、装うことで自信を取り戻し「心のゆたかさ」を増幅して「いきいきと生きる」方法について追究しています。これは、「日本動物病院福祉協会」⑫の動物介在活動で、人の「心のゆたかさ」は最終的に、他の生命と理解しあうコミュニケーションの成立をあげていることで、ますます奥の深い意味と「やす」ことが「心をゆたかに」することと融合するからです。

さらに、「心をゆたかに」するコ

ミュニケーションの大切さをとりあげた「ホールファミリアケア協会」①の傾聴や「思いやりのひとこと」②の言葉がけからは、まずコミュニケーションの第一歩が「聴くこと」であること。そして「癒しのある言葉で語りかける」ことが、どちらかの人間が重荷を背負っているような場合などに関わりなく、普遍的な人間の課題であることも見事に突いたテーマになりました。文中最後の「コミュニケーションは話す人聴く人双方が楽しいと感じなければ」という締めくくりの一文は、心のゆたかさをはぐくむ事について、人間が一人では生きては行けない存在である宇宙の摂理を含む、最も意味の重い

指摘だと言えます。

「福祉サービスを受ける人の自立」から、「心のゆたかさ」にたどり着いた福祉や医療の課題意識の展開の中では、まずサービス利用者の人間性回復を目指す姿勢で、その第一関門を突破。また、福祉施設は利用者を社会から隔離するのではなく、社会との相互理解のために支援するという姿勢の確立にも向かいました。しかしそれだけではなかった。福祉サービスの目標は、もっと大きかったのです。つまり誰もが、楽しく、心ゆたかにいきいきと生きられる、人類の理想社会への挑戦の一環だとい

う心構えの大切さを今回の連載が指摘しました。但しこの挑戦に忘れてならないのは、サービスの現場対応姿勢に安全・安心が裏打ちされなければならないことです。

押し寄せる経済的利潤追求の結果に潜む不安要素との戦いです。サービス対応の一つひとつに、安全体制の枠を作り上げることが勿論必要です。だがそれは、ミサイイル防衛網を作るといような安全・安心ではありません。ミサイイルが飛び交うことのない社会達成に徹する意気込み。それが魂（心）の入った、本当のゆたかさの獲得だと覚悟することがもつと大切でしょう。（たけしたたかし）

※○数字は掲載月・団体敬称略